【活動報告】
令和５年度東京都公文書館夏企画展
「旗本のライフスタイル　～家と仕事と私」

東京都公文書館　史料編さん担当
安部　玄将

はじめに

東京都公文書館では、令和５年（2023）７月 21 日（金）から９月 14 日（木）まで企画展「旗本のライフスタイル ～家と仕事と私」を開催した。

旗本とは、将軍直属の家臣の内、将軍にお目見えすることができる格の者を指す。町奉行、勘定奉行、目付、火附盗賊改といった幕府行政を支える役職も、旗本が就任するものであった。しかし、旗本家に残された史料が少ないこともあり、業務内容や生活の様子が詳らかにされているとは言い難い。そこで今回の企画展では、当館が所蔵する旗本家の史料や、明治政府が調査・作成した旧旗本家の屋敷絵図等を用いて、都市江戸に住まう旗本のライフスタイルを紹介することを目指した。

本稿では企画展の概要、関連コンテンツの展開及びアンケート結果を報告する。

ポスター

１　展示構成及び概要

展示構成は以下のとおりである。

第１章 旗本とはなにか？
第２章 旗本の仕事
第３章 旗本のくらし
第４章 旗本の墓

（1）第１章 旗本とはなにか？

第１章は、旗本入門編として、旗本の来歴がわかる「寛政重修諸家譜」（国立公文書館所蔵）から三河以来の旧臣である大久保彦左衛門忠教などを紹介したほか、「青標紙」（ＣＨ－３３８）や「武家装束著用図」（国立公文書館所蔵）を用いて、武家の服制に関する展示を行った。

このほか、当館所蔵の「武鑑」（ＦＫ－０６０、ＦＫ－０６３、ＦＫ－１０５）を展示し、旗本が昇進してゆく過程を紹介した。

第１章では旗本の来歴、服制、出世に関する史料を提示することで、観覧者が旗本像をイメージできるよう試みた。

（2）第２章 旗本の仕事

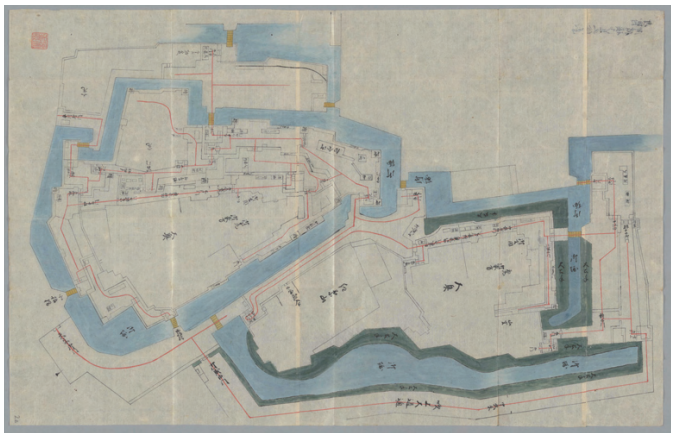
第２章は、旗本の役職、とりわけ目付に就いた旗本を取り上げ、さらに当館所蔵の「新見文書」から旗本新見家が担った役割を紹介した。

新見家は武田家の庶流と称する旗本で、正登（長門守）は寛政７年（1795）に目付に就任する。正登の跡を継いだ正路（伊賀守）は、目付、大坂町奉行を経て、将軍家慶の御側御用取次に就任する。

「新見文書」のうち、江戸城内の修理箇所などを記した「御目付心得書（新見文書）」（新見－２３３）や、その場所と目付の巡回経路を図示した「御城内御破損御見廻絵図（新見文書）」（新見－２５５）などを紹介した。

史料に記された職務内容を、絵図とあわせて視覚的に理解できるよう構成した。

「武鑑」展示風景



「御城内御破損御見廻絵図」

（3）第３章 旗本のくらし

第３章は、江戸に生活する旗本たちのくらしぶりを紹介した。

旗本といっても、大名並みの高禄の者から、御家人との区別があいまいな人々までくらし向きは様々であった。旗本が幕府から拝領する敷地の規模は、家禄高や役職によって異なり、身分秩序を反映していた。

旗本屋敷については、大名屋敷に比べて史料も少なく、未解明な部分が多く残されているが、当館所蔵の「旗本上ケ屋敷図」は旗本屋敷の構造を知るうえで貴重な情報を提供してくれる。今回の企画展では、「藤井理兵衛屋敷絵図」（江戸明治期史料０１０６３７）を展示したほか、「大久保九郎兵衛屋敷絵図」（江戸明治期史料０１０５４２）を４ｍ四方の床面シートに拡大印刷して、旗本屋敷の構造を体感できるように試みた。

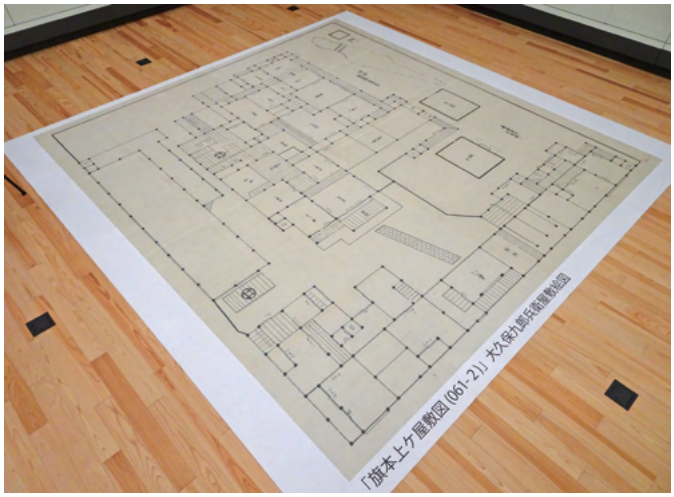
また、旗本の中には、さまざまな文化人との交流の中で趣味を深め、自ら都市文化の担い手となった人物を見出すことができる。本企画展では以下の３名を取り上げた。

森山孝盛は、元文３年（1738）、番方の幕臣・森山盛芳の次男として江戸に生まれた。松平定信に認められ、50代に昇進を重ね、目付・先手鉄炮頭などを歴任、幕臣として充実の

時期を迎える。この間、「自家年譜」（国立公文書館所蔵）という日記を書き続け、旗本の生活と当時の社会について貴重な記録を残した。

宝暦６年（1756）に生まれた、家禄 500 石の旗本細田時富は、武家のたしなみとしての画業を超えて、黄表紙挿絵、錦絵、さらに肉筆浮世絵のプロ作家として生きた人物。絵師としての名を細田栄之または鳥文斎栄之と名乗った。

家禄 2,000 石の旗本松平定朝は、京都町奉行などを歴任する傍ら、園芸の世界、それも花菖蒲の改良と普及に関して他の追随を許さない第一人者となった。



床面シート「大久保九郎兵衛屋敷絵図」

（4）第４章 旗本の墓

第４章は、本企画展の最終章として旗本層の墓について紹介した。元々、三河や甲斐などに本拠地をもっていた旗本の家祖たちは、本貫の地にゆかりの寺院があり、そこに埋葬されることが一般的であった。しかし、原則として江戸城下町に住まうこととなり、旗本が身分として成立していく 17 世紀前半期以降、江戸に菩提所となる寺院を定める旗本家が増えていった。その中で次第に墓標の形式、地下埋葬遺構の形態も固まっていくことになる。

これまでの埋蔵文化財発掘調査の成果から、旗本層の遺骸は多くが甕棺に納められていたことが指摘されている。市ヶ谷に所在する臨済宗長龍寺墓地跡の発掘調査の結果、検出された棺の９割以上が甕棺であり、文献資料から判明していた旗本寺としての性格にふさわしい調査結果が浮かび上がった。

また、赤坂に所在した曹洞宗寺院湖雲寺は、旗本服部保正が、父保次の菩提を弔うため、慶長５年（1600）四谷にあった屋敷内に建立した寺院で、17 世紀後半以降旗本家を檀家に加えていった。なかでも大名家から分家した 7,000 石の大身の旗本永井家のまとまった墓域が発掘され、被葬者が特定できる事例として貴重な情報をもたらした。

今回の展示では、旗本の埋葬に使用された甕棺及び副葬品（東京都教育委員会所蔵）を展示し、本企画展の目玉となった。

甕棺展示風景

２　関連事業の取り組み

本企画展の開催にあわせて、関連事業を展開した。以下ではそれぞれの取り組みについて報告する。

（1）関連講演会

８月25日（金）に関連講演会として、小粥祐子氏（崇城大学准教授）「旗本屋敷図を読む～旗本の出世と住み替え」、西木浩一（当館史料編さん担当）「身分制都市江戸の墓制度～旗本墓を中心に」を開催し、参加者は51名であった。

講演会で実施したアンケートでは、44名の方から回答をいただいた（回答率86%）。アンケート結果は以下のとおりである。

「今回の講演をどちらでお知りになりましたか」（複数回答）について、「知人からの紹介」15%、「当館のホームページ・当館SNS（Facebook・Instagram）」14%、「東京都公式ホームページ・SNS（X：旧Twitter）」６%、「当館内におかれていたチラシ」10%、「図書館など、当館以外の施設におかれていたチラシ」８%であった。ホームページやSNSを通じて講演会の情報を得た方が20%を超えているとともに、口コミがきっかけの場合も約15%に達していた。

講演内容については、「大変良かった」が53%、「良かった」が40%と、概ね好評を得た。具体的な感想としては、講演テーマが旗本屋敷図と旗本墓であったことについて「目新しい視点で面白いテーマでよかった」、旗本屋敷図について「暮らしの一端が見えそうで、ワクワクしました」、「身分でこんなにもお墓が違うのにびっくりしました」といった声が寄せられた。

（2）所蔵史料（アーカイブズ）を読む

当館ホームページでは、所蔵資料の解読講座「所蔵資料（アーカイブズ）を読む」を連載しており、第12回は「目付の心得書を読む」[1]として展示資料の一つである「御目付心得書（新見文書）」（請求番号：新見－２３３）を紹介した。

当館のアンケートにも「所蔵資料（アーカイブズ）を読む」の更新を期待するご意見が寄せられていることから、企画展との連携したコンテンツを配信することに、一定の効果があると思われる。

（3）動画配信

当館では、令和３年以降、企画展の紹介動画を作成しYouTube配信を行っている。本企画展の紹介動画は展示期間中の８月29日に公開した（東京都公文書館企画展「旗本のライフスタイル　～家と仕事と私」[2]）。これまでの動画は、展示風景と資料解説を主とする構成であったが、今回は東京都内の旗本関連施設でのロケを敢行したこともあり、35分間の充実した内容の動画となった。

おわりに～企画展アンケート結果から

アンケート結果から企画展の成果と課題について報告する。アンケートには開催期間を通じて、51名の方から回答を得た。回答者の居住地は、多摩地域63%、23区14%、都外23%という結果で、近隣市町村からの来館者が多かったことがうかがえる。

年齢層は20代４%、30代14%、40代４%、50代23%、60代37%、70代以上18%であった。若い世代に当館をどのようにアピールするかが課題と言えよう。

「東京都公文書館をご存じでしたか」の質問には、「以前から知っていて、利用した事がある」41%、「今回初めて知った」30%、「知っていたが利用したことはない」29%、という回答を得た。今回の企画展をきっかけに初めて来館した見学者が、全体の59%を占めている

ことから、当館を知っていただくうえでも企画展の効果があったといえる。

「この企画展を何でお知りになりましたか」（複数回答）は、「図書館など、当館以外の施設におかれていたチラシ・ポスター」30%、「当館のホームページ・SNS」25%、「当館入り口などに掲示されているポスター」12%、「知人からの紹介」9%、「東京都公式ホームページ・SNS」７%、「来館して開催を知った」４%、「その他」13%という結果となった。インターネット上の宣伝効果もさることながら、掲示ポスターや口コミによる宣伝効果の大きさも無視できない。

「企画の内容はどうでしたか」は、「大変よかった」61%、「よかった」35%、「ふつう」２%、「もう少し」２%と、おおむね好評を得た。

具体的な感想・意見としては、展示内容について「旗本と御家人の違いがよくわかった。旗本の人物像がリアルに記述、展示され参考になった」、「“旗本のくらし”でそれぞれの才能を活かした人生は印象深かった」といった感想が寄せられた。また、床面シート「大久保九郎兵衛屋敷絵図」や甕棺の展示に好意的な感想が多かった。

しかし、文書史料の展示については、もっと多くの史料を見たいという意見に加え、翻刻文や解説の充実を求める意見も多く寄せられた。文書史料の面白さを来館者にいかに伝えるかが、今後の課題といえるだろう。

本展示開催にあたり、多くの方々からご協力を賜りました。ここに機関名及び御氏名を記して感謝申し上げます。（敬称略・五十音順）
国立公文書館、国立国会図書館、千葉市美術館、東京国立博物館、東京都教育委員会、東京都埋蔵文化財センター、東京都立中央図書館、東北大学附属図書館、日本花菖蒲協会、港区教育委員会、小粥祐子、合田恵美子、清水弘、染谷美穂、滝口正哉、平田健

---

1 https://www.soumu.metro.tokyo.lg.jp/01soumu/archives/0703kaidoku_12.htm

2 https://youtu.be/24VEf7zT5tY

※本報告書の著作権は東京都にあります。「私的使用のための複製」や「引用」など著作権法上認められた場合を除き、無断で複製・転用することはできません。